



<N0182> **ムクゲ（木槿）**

愛川町ではハチスと言った方が通りがいい。背丈は高くなり、病害虫にも強く、挿し木で簡単に増やすことができるため、庭木として植えられるほか、田畑の境界の目印としても植えられていた。刈り込んでもすぐに新枝を伸ばすため、人の背丈ほどの高さで長年維持でき、日陰となって畑の作物の生育に影響を与えることもないためだ。筆者は子供の時、畑の境界に杭として幹の上下を逆にして打ち込んだムクゲがそのまま挿し木として生きているのを見たことがある。

花芽はその年の春から伸びた枝に次々と形成されるため、花は秋まで楽しむことができる。中国原産のアオイ科の落葉低木。花は白や紫色など、大きさも大小あり、八重咲きもある。



<N0183>

## カワラハハコ（河原母子）

砂礫が広がっている河原は、夏は灼熱、冬は極寒になる厳しい場所である。普通の植物には耐えられず、ここに生育できる植物は限られている。その一つに真夏の河原に咲くカワラハハコがある。

上流部に人口ダムができている相模川や中津川では、大雨時でもかつてのような増水に見舞われなくなり、砂礫面を若返らせる作用がほとんど無くなっている。その結果、普通の植物が定着するようになり、近年では、背の高い植物やつる植物などでジャングル化し、人の通り抜けもできない場所もある。

現在、カワラハハコはわずかに残る砂礫地に何とか姿を見ることができているが、個体数は少なく県内では絶滅危惧種に挙げられている。キク科の多年草。